



Title	山我哲雄「聖書時代史 旧約篇」
Author(s)	山崎, 保興; Yamasaki, Y
Citation	基督教学, 39, 38-42
Issue Date	2004-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46679
Type	other
File Information	39_38-42.pdf



山我哲雄

『聖書時代史 旧約篇』

(岩波書店 二〇〇三年)

山崎 保 興

本書の著者山我哲雄氏は、知る人ぞ知る、すでに多くの勝れた労作を世に出しておられる旧約学者であるが、その中の一つに本書の前提とも言うべき『旧約聖書時代史』(佐藤研氏との共著、教文館、初版一九九二年、改訂版一九九七年)がある。本書は、その「あとがき」にもあるように、そのうちの「旧約聖書時代史」の部分を底本としつつ、それに大幅に改訂・増補・省略を加えたものである。

著者は、結果的に底本とは書物としての性格も内容もかなり異なるものが出来上がったので、両者の関係と相違を明らかにする意味を兼ねて、まず本書の「前史」に

ついで詳細な説明を行っているが、それによるとそもそもこの書の起こりは『旧約新約聖書大事典』(教文館、一九八九年)の編集実務を、「新約聖書時代史」執筆の佐藤研氏と共に担当した時に遡る。その際二人は同大事典の巻末付録として詳細な歴史年表を作成したのであるが、この年表が思いのほか好評であったので、出版社の意向で、この年表を再録しつつ、その内容を詳しく「解説」する形で独立した書物として『時代史』が成立したというわけである。「年表」は、聖書時代史の舞台となるイスラエル・ユダヤの歴史が中央に据えられ、その両側に、それと直接間接に密接な関連を持つエジプト、メソポタミア、シリア、ギリシア、ローマの歴史が平行的に配置されて、非常に利便性の高いものとなっていた。評者自身も学校の授業の中で大いにこれを活用させてもらったが、今回岩波書店によつて先頃からの新企画である「岩波現代文庫」の一環として本書が計画された際、少なくとも「旧約篇」の場合には、底本のように「文明のあけぼの」に始まる周辺世界にまで言及すると文庫本としては分量的に大きくなりすぎるため、周辺諸地域の

通史的な扱いは割愛して、イスラエル、ユダヤの歴史に集中的に論ずることになったというのは当然のことであつたろう。その結果内容的にはほぼ半分ぐらいになったが、かえつて書物としては「旧約聖書時代史」の性格を強めるものとなったのは幸いであつた。

最初の二つの章、即ち「第一章・乳と蜜の流れる地」「第二章・歴史と伝承」は本書のために新たに書き加えられたものであり、その他の章でも随所にかなり手が加えられており、その結果底本とは全く異なる別の書物になったと言わねばならない。

第一章では、旧約聖書時代史の舞台としてのパレスチナ地方（旧約聖書では「カナンの地」と呼ばれる）の地理的特徴、気候と経済（といつても主に農産物）などが紹介されるが、なんと言つても最大の力点は、天然資源にはほとんど恵まれないこの「猫の額」ほどの土地が、歴史時代全体を通じてオリエント世界の火薬庫とも言うべき重要な役割を果たして来たその最大の理由は、それがエジプト、メソポタミア、シリアとアナトリア（小アジア）、さらにアラビアなどのオリエント世界の大文化

圏を結びつける「陸橋」地帯を形成していたことである。メギドを通つて海岸平野を南下するいわゆる「海の道」（イザヤ書八・二三「海沿いの道」）は、エジプトとメソポタミア、北シリア間の交易での大動脈をなしていたし、またダマスコからヨルダン川東岸地方を南下するいわゆる「王の道」（民数記二〇・一七）は古代オリエントでとりわけ珍重された南アラビア産の香料の交易で重要な役割を果たした。それゆえ古代オリエント全体に覇を唱えようとする勢力にとつてはこの地が戦略上の拠点であり、この地を押さえることが喫緊の要務であつたことは言うを俟たない。こういった状況は、この地に住むイスラエル人にとつて、時によつては大きな繁栄をもたらす契機となつたが、多くの場合にはこの地の領有をめぐる周辺大勢力の抗争に巻き込まれ、翻弄されるという民族的悲劇の原因ともなつたわけである。

ところで「まえがき」において著者は旧約の歴史が「信じられた」歴史であることを指摘する。旧約聖書中のほとんどの文書が、直接的あるいは間接的にイスラエル・ユダヤの歴史に密接に関連した内容を持つているこ

とは言うまでもないが、同時にイスラエル・ユダヤ民族の歴史は、思想や文書成立の単なる「前提」や「背景」であるだけでなく、その本質的な内容、全体を貫く中心主題をなしている。しかし旧約聖書がイスラエルの歴史を主たる内容としていると言つても、ここで言う「歴史」は、現代の科学的な意味での、過去の出来事の正確な記録とその因果関係の客観的究明ということは性格を異にしているのである。第一に、旧約聖書の歴史書の多くは、部分的には古い伝承や資料を用いているとは言え、語られる出来事よりもかなり後になってからまとめられたものであり、起こつたと信じられていた出来事や経過についての後代の信念と解釈を伝えるものである。第二に、古代イスラエル人にとって、歴史とは神によつて動かされるものであり、神の意志、神の行為の展開する舞台であつた。例えば出エジプトという出来事は、彼らにとつて神による救いの歴史、すなわち「救済史」(Heilsgeschichte)にほかならず、王国滅亡とバビロン捕囚という破局に向かう歴史は、イスラエルの度重なる契約違反の罪とそれに対する神の審判の歴史、すなわち「災いの歴史」 Ⅱ

「反救済史」(Unheilsgeschichte)を意味するものであつた。旧約聖書の信仰は決して彼岸的なものではなく、歴史の中で生起する出来事を、そのまま神の意志、神の行為の表現として、限りなく真剣に受け止めるように説くのであり、その意味で旧約聖書の信仰は極めて此岸的であり同時に歴史的存在である。

かくして旧約聖書に描きだされた歴史は「信じられた歴史」であると言ふことができる。然しながらこの「信じられた歴史」を論ずるのは「旧約聖書神学」の課題であり、もともと本書の課題はそのような「信じられた歴史」の背後にある現実の歴史的事態について為しうる限り客観的に論ずることにあるが、そこには宿命的とも言ふべき二つの大きな障害がつきまとう。まず第一に、聖書外資料の絶対的不足ということがある。第二には聖書の記述そのものが「信じられた歴史」であるために甚だ主観的であり、科学的な歴史研究者はそれを「神ぬきで」客観的に再構成して行かねばならないことになる。

本書の著者はこのような困難な課題に対してそれを最大限に引き受けてその使命を達成された、と評者は評価

する。本書が出版されて間もなく著者から寄贈を受けたわけであるが（いつも新著が世に出る度にいち早くそれをもたらされる好意に対して、この機会に改めて謝意を表したい）、早速通読して先ず何よりも今更の如く著者の長年蓄積された学殖とその力量を実感した。読後間もなく著者と出会った時、「なかなかうまく書いていますね」と甚だ通俗的な感想を述べたが、うまく書けているということの中身が肝心であることは言うまでもない。

各時代史における問題点が遺漏なく網羅されていること、またそれらについての昨今の新しい研究の成果がくまなく取り入れられ紹介されていること、そうしてそれらのすべてがすこぶる手ぎわよく処理されていること等々、改めて著者の明敏さを感じざるを得なかつた次第である。以下特に気づいた事柄についてのみ簡単に述べるに留めたい。

旧約聖書によれば、エジプトを脱出したイスラエルはシナイ山でヤハウェと契約を結び、律法を与えられたと言う。これがいわゆる「シナイ契約」であるが、しかし著者によれば最近の研究では、シナイ山に関わる伝承は

元来は契約締結とも律法授与とも関係のない、聖なる山における神顕現（テオファニー）の伝承であつたことが広く認められていると言う。ここでわれわれがすぐ連想するのは、例の出エジプト記三章の「モーセの召命」に関する記事、「エファイエ・アシエル・エファイエ」（「わたしは有つて有る者」三・一四a）であるが、本書にはこれについての直接の言及は無い。が、しかし山我氏は既に『日本の神学四二号』（二〇〇三年）誌上の書評（木田献一『神の名と人間の主体』）において、この問題について詳細に論及している。その委細は省略せざるを得ないが、木田氏が旧約宗教の特殊性とユニークさの根源を「エファイエ」という神名の啓示に求めているのに対して、山我氏は、創唱者としてのモーセの存在、誓約共同体としてのイスラエルの成立、預言者の権力批判、ヤハウェ宗教の普遍性等、旧約宗教のユニークな諸要素を、旧約聖書の中にただ一箇所しか出て来ない、しかもその表現が甚だ曖昧で謎めいた「エファイエ」という神の固有名詞に一元的に還元して説明しようとする木田氏の論理のある種の危うさを指摘する。そうしてもっと重大な

事柄であろうと思われるのは、議論の背景としての歴史認識の問題が問われていることである。旧約思想を扱う場合、それがたとえ神学的考察であつても歴史の問題を捨象し得ないことは言うまでもないと述べ、出エジプト伝承が歴史的核を持つことや、その指導者として「モーセ」という名の人物が実在したことは間違いないと考えていることを、この『聖書時代史旧約篇』にも記したことであるが、としながら強調している。そうしてこれらのことについては、夙にわれわれ自身も本書の著者に即して認識しているところである。以上甚だ竜頭蛇尾のそしりを免れ難いことを覚悟しつつ、もはや紙数も尽きようとしているので、この拙い書評をこれで終わりたい。